

現 地 通 信

熱帯病学関係教科書解題

伊 藤 邦 幸*

は じ め に

後から来られるあなたのために、熱帯地域の田舎への単身赴任の場合を想定して、私がここカルカッタ熱帯医学校 School of Tropical Medicine, Calcutta の Diploma for Tropical Medicine and Hygiene のコースにいた一年の間にお世話になった教科書の解説を試みましょう。

全体として、いわゆる「文明」を遠く離れて単身で赴任する場合、頼りになるのは書物だけです。特に日本で医学教育を受けたわれわれの場合、自分のいた教室の専門の領域以外はほとんど無知に等しいわけですが、患者のほうでは何科の先生を尋ねてくるわけではありません。だから公衆衛生が専攻であっても開腹手術をするくらいの心がまえがいります。そうかといって、今の日本で各科をいちおうこなせるようになるには一生かかっても足りません。したがって、唯一の方法は、ある程度基礎的なことを学んだ後は、患者が来てから、患者を待たしておいて本を調べることでしょう。一度ジャングルへ入れば、君

* 京都大学大学院（医学研究科）修了

の頭脳と君の持っている本だけが、いわゆる「文明」のすべてであり、人類の知恵の全体です。そんなところでは、日本では思いもかけぬような本が、押しいただいて読んでも足りないくらい役に立ちます。一般に百科全書の類は文化から隔絶された世界ほど有用性を増し加えます。日頃から専攻以外の領域も全書・双書等を揃えておくと役に立ちます。小生一人院長の病院を見学するときは、心して蔵書類を見せて貰ったけれども、アメリカ人の医師たちは心憎いばかり一流の本をがちり揃えていました。インターンを終えた後2年くらいだけで来た人が、各科の手術をこなすのは驚くほかはありませんが、いちおう彼らなりに準備をととのえているわけです。

それから、赴任先の旧植民国（例えばインドシナ半島ならフランス）の言語による教科書を数冊揃える必要があります。現地で同業者と話をする場合や看護婦を使う場合、必ずしも英語が通じるとは限らないからです。

旧イギリス系植民地では、医学生は The English Language Book Society（以下 E. L. B. S. と略します）発行のアジア、アフリカ向け廉価版を用いているところが多いようです。安いし、内容は厳選されているし、まずこのへんから買い始めるのが妥当でしょう。この解説もなるだけ E. L. B. S. に含まれているものを扱います。

もう一つ。でかける前には、熱帯病のためにあまり時間をつかわないほうが得策かと思えます。症例を診ずにつめ込んだ知識は蒸発し易く、不経済です。むしろかつて温帯にも多く存在し、今は減少しつつある疾患、例えば結核とかジフテリアとかポリオとかを復習しておかれるほうがよいでしょう。熱帯病そのものに関しては船か飛行機の中で、後述(5)の佐々さんの本を通読しておくくらいでよい

でしょう。

それでは本論に入りましょう。

(1) Manson-Bahr. *Manson's Tropical Diseases ; A Manual of the Diseases of Warm Climates*, 第16版 1966, E.L.B.S. 版 1968, 1131ページ。

熱帯病といえばまずマンソンです。そこで小生もまずマンソンから読み始めました。かなりの時間をかけたけれど、結局読み終わらせませんでした。小生のように怠惰な男には、いささか浩瀚に過ぎました。それに Entomology や Clinical pathology に至るまで、何でもあるだけに、いずれもいささか食い足りません。活字が小さ過ぎる点からも、通読用の書物というよりは参照用の書物でしょう。この本のもう一つの欠点は、読んだ後にほとんど何も残らないということです。どうしてもよいような些細なことは割によく記憶に残っていますが、くり返して読んでも何も残らないところがあるのは、やはり、こちらのせいばかりではないでしょう。他方この本の長所は、病理と疾病の分布に強いことです。しかし、何といってもマンソンの最大の長所は熱帯病学というものを建設したパトリック・マンソンの燃えるがごとき気迫がのこっているように思われることでしょう。その気迫がいささか冗漫な叙述を通して、まどろみ勝ちなわれわれを鞭打ってやみません。日本人が熱帯病に関してこれだけのものをものにする日がいつの日か来るのでしょうか？ マンソンは、ラッフルズやリビングストンらと同じように興隆期の大英植民帝国の生んだ高嶺の花ではありますまいか。しかし彼らの築いた熱帯医学というものが、旧植民帝国没落の後にも生きながらえて発展し続け、その恩沢を独立後の旧植民地の人民におよぼしつつあることは、あらためて学問の意義を考えさせます。

(2) Adams and Maegraith. *Clinical*

Tropical Diseases, 第2版 1960, 540ページ。(E.L.B.S. の中にもあります)

Manson が読み難いのと、私が講義を受けた教授が、いちおうこの本を基準にしていたので、試験勉強はもっぱらこの本でやりました。読み易く参照し易いのと要領よくまとめているので、まず推奨するに足るものと思います。

これとほぼ同じ内容のものとしては、

(3) Banerjea & Bhattacharya. *A Handbook of Tropical Diseases*, 第4版 1967, Calcutta. 551ページ。

がありますが、私はちらっと参照しただけでした。これは上記著者のほか7名の協力による分担執筆です。似たような本ですから、

(2) か (3) かどちらか1冊あればよいでしょう。

(4) Hunter, Frye, Schwartzwelder. *A Manual of Tropical Medicine*, 第4版 1966, Indian 版 1970, 931ページ。

これは、アメリカ系の学者40名近くが共同してこしらえた、いわばアメリカ版マンソンという感があります。病理の組織写真のほか356枚の図版がありますが、インド版は安いかわりに (US\$ 18.50, Rs 27.75, 約1/7の価格になる)、印刷の汚いのが残念です。各章ごとに参考文献もついています。私はペラペラとめくっただけですが、大分キナ臭いのが気がかりです。単に参照するだけなら、マンソンより内容も新しく充実しているところが多いようです。巻頭には熱帯病関係の英文の主な教科書のリストもついています。

一番簡単なものとしては、

(5) 佐々 学ほか『熱帯病学』1966, 東京大学出版会, 338ページ。

があります。これは上記 (2) Adams & Maegraith によりながら、ところどころ Manson-Bahr 等を参照し、著者達の経験等も織り込んでこしらえたもののようですが、

けっこうよくまとめてあります。これよりもさらにページ数の少ないものとしては、

(6) Stanley Davidson. *The Principle and Practice of Medicine*, 第9版 1968, E.L.B.S. 第3版 1968.

の付録として収録されている、

(6') Wright & Baird. *Tropical Disease* (E.L.B.S.) 1968, 176ページ

があります。これは小生の知っている限り一番簡単な通論ですが、熱帯病の主な疾患のうちかなりのものが、温帯と共通であるため本文にくりこまれていているという不便があります。しかし、いちおう自分の知識をチェックし、最少限のレベルに達するには何が欠けているかということを知るためには有益かつ手頃な本と思います。

日本の病院でお目にかかる機会がほとんどなく、しかも熱帯地域に赴任すれば、ほとんど必ずみなければならぬものに、寄生虫疾患があります。したがって、われわれの知識の補強工作はまず寄生虫学から始めるのが妥当でしょう。

(7) K. D. Chatterjee. *Parasitology (Protozoology and Helminthology) in Relation to Clinical Medicine*, 第7版 1969, Calcutta, 226ページ.

私の考えでは、よき教科書とは、

1) 内容が思い切って単純化してあり、最もありふれたもののみを扱っていること。

2) 叙述が分かり易いこと。

3) 必要最少限の知識の記憶に便利なこと。

4) 参照に便利なこと。読み返しがおっくうでないこと。

5) 図版(なるべくならば色彩図版)の数が多く印刷の鮮明なこと。

6) 病理と臨床の調和がとれていること。

7) 多少の興味をも喚起しうること。

以上のすべての条件をみたしたものとして

私はこの本を世界的名著として推薦するのに躊躇しません。その他、①アメーバー赤痢、②マラリヤ、③カラアザールなどいわゆる熱帯三大疾患の必要かつ十分な知識がえられること。寄生虫のライフ・サイクルの図式化などは独創的ともいうべく、①われわれが一目で思い出すためにも、②パラメディカル・ワーカーの教育、③患者への説明等のためにも、この上なく便利にできていること、類書の群を抜いています。余談ですが、私がカルクタ滞在1年の間に、東南アジア各地の先輩友人医療関係者のために購入した書物のうち、マンソンが5冊であったのに対し、この本が10冊を越えていたことから、小生のこの書物に対する傾倒のほどをお察しいただけるかと存じます。もともとこの本は、

(8) K. D. Chatterjee. *Human Parasites and Parasitic Diseases*, 1952, Calcutta, 766ページ, 図版328, 内82色付.

を要約してこしらえたものですが、こちらのほうは読んでみて面白いけれども、何分大冊過ぎてハンディというわけには参りません。

寄生虫と関係して、われわれの盲点は、医用動物学(主として医用昆虫学)ではないかと思います。この点に関しては、小生

(9) Roy & Brown. *Entomology*, 1954, Calcutta, 413ページ.

を用いましたが、これは通読用の本ではなく、目下絶版ですし、すすめられません。むしろ(1)のマンソンか(4)のハンターらの該当箇所を通読なさるほうが有益ですし、さし当たってはそれで十分です。

寄生虫に関係して、もう一つ注意すべきことは、日本語の薬理関係の本は、私のみた限りいづれも寄生虫症に関しては全くの時代おくれで、20年前の知識をそのままに記しており、世界の趨勢からは完全にはずれているということです。優秀処方に関する標準的といわれている本、あるいは新薬の薬理に関す

る名著の誉れ高い新刊書でもこの通りですから、われわれが学生時代に用いた教科書など例外ではありません。日本にいるときは普通は患者に会う機会がありませんのでそれでもこと足りますが、熱帯地方の田舎では、患者の90%以上は寄生虫保有者でしょうから、そういうわけには参りません。従って赴任に先立って、なるべく詳細な大著のなるべく最新の版を用意されることをおすすめします。私たちは、教授の講義がそれに則していたため、次の本を用いました。

(10) Goodman & Gilman. *The Pharmacological Basis of Therapeutics*, 第3版 1968, New York, 1785ページ。

また赴任先への薬品の供給源によって、その国の局方規準を記した書物を1冊は用意する必要があります。インドでしたら I. P. というものです。もちろん、宗主国の規準、インドでしたら B. P. も必要です。この目的のためなら、どんな本でもよいのですが、私たちはただ新しいという理由だけで、次の本を用いました。

(11) N. K. Dasgupta. *Modern Pharmacology and Therapeutics*, 第1版 1969, Calcutta, 817ページ。

カルカタでも患者の75%は伝染病ということです。したがって、われわれが任地でまず手がけることのできるもの、また手がけざるをえないものは、細菌性疾患です。そこで任地での寄生虫学に次ぐ勉強は、細菌学の復習ということになりましょう。どんな本でもけっこうかと思いますが、今回私が用いたのは次の本です。

(12) F. S. Stewart. *Bacteriology and Immunology for Students of Medicine: Formerly Bigger's Handbook of Bacteriology*, 第9版 1968, E.L.B.S. 版 1968, 603ページ。

この本は、切り捨てが十分に効いており、時に簡潔すぎてくり返して読まないとい味の

つかみ難いところもありますが、教科書としては出色のできばえです。初版は1925年ですが1968年の第9版で面目を一新したの由。保守的な態度を堅持しながら、内容がすこぶる新鮮な点は感嘆にたえません。免疫学など日本にいたときはもっと新しい事実や学説を学んでおりながら、この書物のほうが興味しんしんでした。私たちが在学中に用いた細菌学および免疫学の教科書も持参しましたが、不必要なことの多き多く、出版当時は新しいものに見えたのでしょうが、手を加えずに刷り続けているうちに、ほこりに埋もれた図書室のようになり、今では一門の不勉強の記念碑であるかのごとき観があるのに比べると、何ともうらやましいことでした。ただしこの本は必要最小限の事実と理論に限られていますので、実際上の操作には次の本が便利です。

(13) R. Cruickshank. *Medical Mycology*, 第7版 1965, E.L.B.S. 版 1968, 1070ページ。

一般に臨床検査技師に、日本人を期待することは望めませんから、この本の他に、金井泉『臨床検査法提要』に当たるものとして、次のものなどいかがでしょう。

(14) Kolmer, Spaulding, Robinson. *Approved Laboratory Technic*, 第5版 1969. 第5版を基にして Indian 版が出ています。1180ページで22ルピーです。

熱帯医療に関する3種の神器の一つとしての皮膚科の教科書としては、これというものにめぐり合いませんでした。試験は次の2冊ですませましたが、これは熱帯特有の皮膚病を扱ったものではありません。もっとも、熱帯地方でも、熱帯地方特有な皮膚病よりも、不潔と低栄養に基因する温帯とも共通の皮膚病が大部分と思います。

(15) P. Borrie. *Roxburgh's Common Skin Diseases*, 第13版 1967, E.L.B.S. 版 1969, 485ページ。

(16) Andrews & Domonkos. *Diseases of the skin*, 第5版 1968, 図605, 749ページ.

こちらは組織の写真が入っている点で(15)のラクスバルグより勝っていますが、どうもまとまりが悪くて読んでも頭に残りませんでした。日本で学んだ知識を英語で整理するためには(15)のラクスバルグのほうがずっと適当に思います。

実際に当たって独学者のために役に立つのは、何よりも原色の図説です。

大きなものに手が出ない場合には、次の(17), (18)が有用です。

(17) 原田 儀一郎ほか『皮膚病診療図説 I, II』, 第1版 1960, I巻 239 ページ, II巻 235 ページ.

もちろん、これの基になった日本皮膚病図譜4巻が入手できれば、それもけっこうかと思えます。

(18) 原田, 山田『皮膚病類症鑑別図譜』第1版 1965, 125ページ.

英文で(17)に当たるものとしては,

(19) H. C. G. Semon. *An Atlas of the Commoner Skin Diseases*, 第3版 1946, Bristol, 339ページ.

がありますが、助手や同僚のために用意するのでなければ,(17), (18)と(15)で用はたりと思います。

熱帯の皮膚科で、割に多いのは、真菌性皮膚疾患ですが,

(20) N. C. Dey. *Medical Mycology*, 1958, Calcutta, 120ページ.

はインドでの経験に基づいており、手頃な本ですが、治療などはいささか古過ぎますので、他の本を補う必要があります。例えば、次の本などが役に立ちました。

(21) Moss & McQuown. *Atlas of Medical Mycology*, 第3版 1969, Baltimore, 366ページ.

レプラに関しては,

(22) Dharmendra. *Notes on Leprosy*, 1960, (Ministry of Health, Gov. of India). が、簡にして要をえているのと図版が多いので便利でしたが、目下絶版ですので、やはり Cochrane & Davey. *The Theory and Practice of Leprosy*, 1964, Bristol でも用意するほかはないでしょう。

さて、熱帯地方というよりは貧窮地域における最大の問題としての、低栄養学すなわち栄養失調学ですが、適当な書物がなく、私たちの講義を受けた教師の話では、まあ次のような本から始めるほかはあるまいとのことでした。

(23) D. B. Jelliffe. *Infant Nutrition in the Subtropics and Tropics*, 1968, W. H. O. Monograph Series, 335ページ.

(24) A. S. Ritchie. *Learning Better Nutrition*, 1967, FAO Nutritional Studies, 264ページ.

も面白そうな本であり、巻末にこの方面の詳しい文献名が収められております。

しかし、小生としては、もっと実用的な書物として、「農産加工十二ヶ月」あるいは「四季の農産加工」とか料理とその材料の集め方づくり方を記した本を携行されることをおすすめします。

公衆衛生関係の仕事は、開発途上国において、最も急を要し、かつ最も効果の大きい仕事であることは御承知の通りですが、この方面の教科書は、カルカッタ熱帯医学校でのこの方面の講義と同様、雄弁(名文)とナンセンスに満ちており、耳に(あるいは目に)は快いが、意味するところは何もありません。代表的な著書としては,

(25) B. D. Ghosh 編. *A Treatise on Hygiene and Public Health*, 第15版 1969, Calcutta. 744ページ.

があり、もう少し簡単にしたものとしては,

(26) Y. P. Bedi. *Hygiene and Public Health*, 第10版 1970, 519ページ。
があります。

インド人の公衆衛生に対する考えを知るためなら、次の本で十分と思います。そして W.H.O. の仕事などを理解するためにも、少なくともこの本1冊くらいは目を通す必要があります。

(27) An Experienced Professor. *Preventive & Social Medicine*, 1969, Calcutta, 343ページ。

これは Prof. G. Sen によるカルカッタ大学医学部での講義の筆記を本にしたものですが、冗長でない点だけでも、前記(25)の大著よりはましであると思います。私たちとしては、結局は W.H.O. の *Public Health Papers* 等を手引きとして、自ら開拓して行くほかはないでしょう。日本語の教科書でもこれといえるほどのものがありましたでしょうか。

最後に、Calcutta School of Tropical Medicine での指定参考書ではありませんが、そこでの教育に最も欠けていた面を補うべきものとして、次のものをあげましょう。

(28) Maurice King. *Medical Care in Developing Countries: A Primer on the Medicine of Poverty and a Symposium from Makerere*, 1966, Nairobi.

この本の中には、単身赴任の際に携行すべき厳選された40冊の本のリストのほか、最小限の試薬のリスト、その他サービスという点でおおよそ考える限りの善意がこめられています。

お わ り に

カルカッタの熱帯医学校の歴史をみても明らかのように、熱帯医学というものは、そもそもの始まりは植民地侵略軍の兵士の健康管理の必要から出発し、その後、植民地の中に

陸上の孤島をつくって生活した植民地経営者に奉仕しつつ、その庇護のもとに成長し、近年に至ってようやく W. H. O. 等の影響下に一般大衆にまでその恩恵をおよぼし始めたといえましょう。* 一方マラリアやカラアザールが、カルカッタの熱帯医学校でも見られなくなったということは、確かにすばらしいことに違いありません。留学中に、何人かの教授から、

「お前の国では何が最もありふれた疾患なのかね？ 恙虫病かね。それとも日本住血吸虫症かね？」

と聞かれました。私は、インドに関しても、コレラや天然痘が昔語りになる日も、そう遠くはないことを期待し想像する者です。

それでは、熱帯医学の前途には洋々たるものがあるのでしょうか。そう思われる方は(4)のハンターらの著書の序文をお読み下さい。そこにはアメリカ陸軍少将ブルント氏が次のように記しています。

「アメリカ軍軍医部は、わが軍隊が戦闘を進めている現時点において、時宜にかなった本書の出版を、ここに改めて感謝する。」

そして、この書物は、今のところ最も整った熱帯病教科書の一つです。

それでは、わが国の熱帯医学の将来はいかがでしょうか。もし私たちが学問というものを、他人が見出さなかった事実の発見とそれを記載した paper の集積という風のみ理解するならば、行きつくところはハンターの著作のような形で収斂せざるを得ないでしょう。ハンターらの著書の中に在日米軍の業績が散見するのも暗示的です。

それでは一体学問はいかなる志向をもって

* ちなみにカルカッタ熱帯医学校の学長室が 10cm に余る厚さの鉄の扉をもってしかも二重に守られているということは興味ある事実です。医者という職業の人間が他の人間をそれほどまでに怖れなければならなかったということは、驚くべきことではありませんか。

進めらるべきでしょうか。熱帯病学概説の教科書だけをみても、私たちの在りかたは実に厳しく問われているではありませんか。

(1970年11月 ラクソールにて)

The List of Medical Books bought in Calcutta by Drs. Itohs, 1970.

- 1) (1) Philips H. Manson-Bahr. *Manson's Tropical Diseases*, 16th Ed. 1966, ELBS 1967.
- 2) (4) G.W. Hunter, W.W. Frye & J.C. Swartzwelder. *A Manual of Tropical Medicine*, 4th Ed. 1966, Indian Ed. 1970.
- 3) (2) A. R. D. Adams & B. G. Maegraith. *Clinical Tropical Diseases*, 2nd Ed. 1960.
- 4) (3) J. C. Banerjee & P. B. Bahattacharya. *A Handbook of Tropical Diseases with Treatment and Prescriptions*, 6th Ed. 1967.
- 5) (6) S. Davidson. *The Principles and Practice of Medicine*, 9th Ed. 1968, ELBS 1968.
(F. J. Wright & J. P. Baird. *Tropical Diseases—A supplement to the above—3rd Ed.* 1968.)
- 6) E. N. Chamberlain & C. Ogilvie. *Symptoms and Signs in Clinical Medicine*, 8th Ed. 1967, ELBS 1967.
- 7) J. Dhar. *A Synopsis of Medical Treatment*, 1966, Calcutta.
- 8) R. W. B. Ellis & R. G. Mitchell. *Disease in Infancy and Childhood*, 6th Ed. 1968, ELBS 1969.
- 9) J. Kyle. *Pye's Surgical Handicraft*, 19th Ed. 1969, Indian Ed. 1969.
- 10) A. Clain. *Hamilton Bailey's Demonstrations of Physical Signs in Clinical Surgery*, 14th Ed. 1967, ELBS 1967.
- 11) C. Illingworth & B. M. Dick. *A textbook of Surgical Pathology*, 10th Ed. 1968, ELBS 1969.
- 12) H. Burrows & R. W. Raven. *Surgical Instruments & Appliances used in operation*, 14th Ed. 1952, Lond.
- 13) J. B. Lawson & D. B. Stewart. *Obstetrics and Gynaecology in the Tropics and Developing Countries*, 1st Ed. 1967, ELBS 1967.
- 14) (8) K. D. Chatterjee. *Human Parasites and Parasitic Diseases*, 1952, Calcutta.
- 15) (7) . *Parasitology in Relation to Clinical Medicine*, 7th Ed. 1969.
- 16) E. J. L. Soulsby. *Helminths, Arthropods and Protozoa of Domesticated Animals*, 6th Ed. of Moennig's Veterinary Helminthology & Entomology 1968, ELBS 1969.
- 17) (9) D. N. Roy & A. W. A. Brown. *Entomology (Medical & Veterinary) including Insecticides & Insect & Rat Control*, 1954, Calcutta.
- 18) M. S. Mani. *General Entomology*, 1968, Calcutta.
- 19) A. D. Imms. *A General Textbook of Entomology*, 9th E. 1964, ELBS 1965.
- 20) U. S. Dept. of Agriculture. *Insects—The Yearbook of Agriculture*, 1952, Indian Ed. 1969.
- 21) (12) F. S. Stewart. *Bacteriology and Immunology for Students of Medicine*, Formerly Bigger's Handbook of Bacteriology, 9th Ed. 1968, ELBS 1968.
- 22) (13) R. Cruickshank. *Medical Microbiology: A guide to the Laboratory Diagnosis and Control of Infection*, 11th Ed. 1965, ELBS 1968.
- 23) G. C. De Gruchy. *Clinical Haematology in Medical Practice*, 2nd Ed. 1968.
- 24) (14) J. A. Kolmer, E. H. Spaulding & H. W. Robinson. *Approved Laboratory Technic*, 5th Ed., Indian Ed. 1969.
- 25) (15) P. Borrie. *Roxburgh's Common Skin Diseases*, 13th Ed. 1969, ELBS 1969.
- 26) (16) G. C. Andrews & A. N. Domonkos. *Diseases of the Skin*, 5th Ed. 1968, Philadelphia and London.
- 27) (20) N. C. Dey. *Medical Mycology including Laboratory Technique and Therapeutic Recipes*, 1958, Calcutta.
- 28) (21) E. S. Moss & A. L. Macquown. *Atlas of Medical Mycology*, 3rd Ed. 1969, Baltimore.
- 29) (10) L. S. Goodman & A. Gilman. *The Pharmacological Basis of Therapeutics*, 3rd Ed. 1968, New York.
- 30) (24) J. A. S. Ritchie. *Learning Better Nutrition: A second study of approaches and techniques*, 1967, FAO.
- 31) (25) B. N. Ghosh. *A Treatise on Hygiene and Public Health*, 15th Ed. 1969, Calcutta.
- 32) (26) Y. P. Bedi. *A Handbook of Hygiene and Public Health*, 10th Ed. 1970, Calcutta.
- 33) (27) An Experienced Professor (G. Sen).

- Preventive and Social Medicine*, 1969 Calcutta.
- 34) A. B. Hill. *Principles of Medical Statistics*, 8th Ed. 1966, ELBS, 1966.
 - 35) *Dorlands's Illustrated Medical Dictionary*, 24th Ed. Asian Ed. 1965.
 - 36) (23) D. B. Jelliffe. *Infant Nutrition in the Subtropics and Tropics*, WHO Monograph Series 1968.
 - 37) _____. *The Assessment of the Nutritional Status of the Community*, (with special reference to field survey in developing regions of the world), WHO M. S. 1966.
 - 38) E. G. Wagner & J. N. Lanoix. *Water Supply for Rural Areas and Small Communities*, WHO M. S. 1959.
 - 39) _____. *Excreta Disposal for Rural Areas and Small Communities*, WHO M. S. 1958.
 - 40) T. M. Pollock. *Trials of Prophylactic Agents for the Control of Communicable Diseases ; A guide to their organization and evaluation*, WHO M. S. 1966.
 - 41) A. W. A. Brown. *Insecticide Resistance in Arthropods*, WHO M. S. _____.
 - 42) _____. *Terminology of Malaria and of Malaria Eradication*, WHO M. S.
 - 43) S. Swaroop. *Statistical Methods in Malaria Eradication*, WHO M. S. 1966.
 - 44) M. H. Holstein. *Biology of Anopheles Gambiae*, WHO M.S. 1954.
 - 45) L. B. Edwards, C. E. Palmer & K. Magnus. *BCG Vaccination*, WHO M. S. 1953.
 - 46) Y. Obayashi. *Dried BCG Vaccine*, WHO M. S. 1955.
 - 47) K. Lyman. *Basic Nursing Education Programmes ; A guide to their planning*, WHO Public Health Papers, 1961.
 - 48) B. Abel-Smith. *Paying for Health Services ; A study of the costs and sources of finance in six countries*, WHO P. H. P. 1963.
 - 49) *Aspects of Water Pollution Control*, WHO P. H. P. 1962.
 - 50) B. H. Dieterich & J. M. Henderson. *Urban Water Supply Condition and Needs in Seventy-five Developing Countries*, WHO P. H. P. 1963.
 - 51) B. Abel-Smith. *An international study of Health Expenditure and its relevance for Health Planning*, WHO P. H. P. 1967.
 - 52) J. M. G. Wilson & G. Junger. *Principles and Practice of Screening for Disease*, WHO P. H. P. 1968.
 - 53) F. Bourliere. *The Assessment of Biological Age in Man*, WHO P. H. P. 1970.
 - 54) Bulletin of WHO : Vol 34, No 4 ; Tuberculosis.
 - 55) _____ : Vol. 36, No 5 ; Tuberculosis.
 - 56) _____ : Vol. 9, No 3 ; Malaria in India.
 - 57) _____ : Vol. 9, No 2 ; Control of Endemic Goiter.
 - 58) _____ : Vol. 19, No 5 ; Tuberculin.
 - 59) Technical Report of WHO ; No. 103, Malaria Conference for the western Pacific and South-East Asia regions.
 - 60) _____ ; WHO expert committee on Tuberculosis.
 - 61) _____ ; Resistance of Malaria parasites to drugs.
 - 62) _____ ; Prevention of the Re-Introduction of Malaria.
 - 63) Bulletin, Chronicle, Public Health Paper, Technical Report of WHO since 1970.
- () 内は「熱帯病学関係教科書解題」引用番号